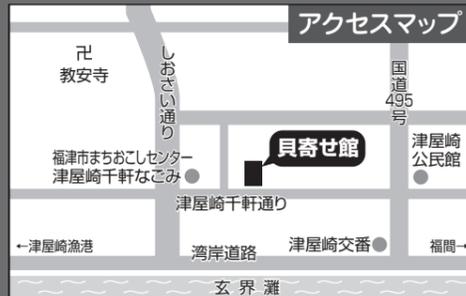




▲貝寄せ館で語るうらなたち

貝寄せ館

春、津屋崎海岸には、さまざまな貝が打ち寄せられる。
「貝も人も集まり楽しめるまちづくり」への思いを込めて……



などが展示されている。江戸時代から明治に掛けて栄えた「津屋崎塩田」や炭鉱王と言われた伊藤伝右衛門と津屋崎開発のかかわりなどをパネルで紹介。
散策マップを配り、ボランティアが1人2時間200円で町内を案内している。
開館 毎週火、土、日、祝日の午前11時～午後3時

「津屋崎千軒なごみ」近くの一軒家が並ぶ一角に、ひよっこりと白木造りの外観の小さな建物がある。そこには「貝寄せ館」の看板が掲げられている。看板がなければ、気づかずに通り過ぎてしまうかもしれない。
津屋崎千軒通りで畳製造を営んでいた田畑猛さんが「もう使わんから、まちのために役立ててほしい」と自宅に隣接する作業場（17平方メートル）を無償で貸与。県外に出た住民も含め寄付金約60万円が集まり、内外装を整えることができた。
室内には、住民が集めた貝の標本



▲今年3月25日、津屋崎のまちおこしボランティアグループ「津屋崎千軒・海とまちなみの会」（吉村勝利会長ほか96人）が、まちおこしの拠点となる施設をつくりました。

● 津屋崎の貝の種類

津屋崎の浜辺には、一体どれくらいの種類の貝がいるのでしょうか。「貝寄せ館」には、約80種の貝が展示されています。会員から大小のガラス瓶に詰め込まれて次々と搬入されています。展示する貝は、まだまだ増えそうです。



▲会員から次々に持ち込まれる貝殻。中には貴重な貝もあるという

津屋崎は白砂青松の豊かな海岸に恵まれ、「九州の鎌倉・江の島」と謳われています。貝寄せの浜とも呼ばれる津屋崎の浜

● 「貝寄せの浜」津屋崎

津屋崎の浜が「貝寄せの浜」と呼ばれるゆえんは、かつては、212年前にさかのぼります。実は、江戸時代後期の寛政12年(1800年)、津屋崎浦を訪れた当時6歳の第十代福岡藩主黒田斉清公に、貝手頭の佐治徳左衛門が21種類の貝の絵図を昼休みに献上したというエピソードがあったのです。

「貝寄せ館」では、大賀孝男さん(80歳)・康子さん(70歳)夫妻(北ノ一区)が、佐治徳左衛門から斉清公への献上貝21種と同じ貝を津屋崎の浜で採集した標本を展示しています。



▲生活排水で汚染されて変色した貝の展示もある

しかし、現在は防波堤築造や海岸付近の埋め立てによる自然環境の変化、海の汚染などで海産貝類の中には姿を消し、まれにしか見つからない種類も急速に増えているといわれています。



▲佐治徳左衛門から斉清公への献上貝21種と同じ貝を津屋崎の浜で採集した標本を展示



▲津屋崎のピン一杯に詰められて展示されている貝。なんだか懐かしい...



◀恋の浦の海水で作った塩も販売している



▲津崎米夫さんの記憶を元に作成された昭和初期の津屋崎千軒の様子を伝える貴重な地図



▲昔の津屋崎の町並みを講義する津崎米夫さん

「貝寄せ館」には昭和初期の津屋崎千軒の町並みを再現した貴重な地図もあります。「津屋崎千軒・海とまちなみの会」の最長老ガイド・津崎米夫さん(88歳・新東区)の抜群の記憶を元に作成されたものです。旅館、指物大工、桶屋、染物屋、ピナ屋、玉突屋などいろいろなお店が津屋崎千軒にぎゅうぎゅうに詰まっていたことがわかります。

● 昭和初期の津屋崎千軒の貴重な地図がある

この地図をじっくり眺めると、昭和初期の津屋崎千軒にタイムスリップした気分になることができます。

貝寄せ館では、1回200円で、観光ボランティアガイドのサービスマンも行っています。お客さんにどのくらい時間があるかで、案内する場所が違いますが、町の町並みを紹介しながら、藍の家に案内します。藍の家にも観光ボランティアガイドがいるので、ガイドを藍の家に引き継いで、もう一つあるといえます。そうすることでお互いに良い関係もできているようです。

「どなたでも気軽に立ち寄ってください。お茶を出します。最長老の津崎米夫さんがいるときは、馬鉄の話や、津屋崎千軒の歴史の話などが、何ぼでも聴けますよ」と吉村会長は語っていました。



▲男のたまり場となることも

● 観光ガイドをしてくれる